

# 主体的に学ぶ小説教材の学習指導方法の工夫

——『山月記』での取り組みを中心に——

黒瀬直美

## 一 はじめに

昨年十二月に広島県教育委員会は「学びの変革」アクション・プラン」を策定し、グローバル化する二十一世紀社会を生き抜く人材の育成を目指して、従来の知識ベースの受動的な学びから、習得した知識を活用した課題解決学習への転換を打ち出した。現場では盛んに研修会が持たれ、授業のあり方を見つめ直すことが問われている。

そこで私自身も、今までの実践の積み重ねを整理し、今までの試行錯誤や失敗の連続をもとに、「主体的な学び」を意識的に導入した実践を行ってみようと決意した。また折しも、職場で小説教材の指導について問題意識を持っていた数人の先生たちと話し合う機会があり、その先生方から様々な視点を得たことも動機になっている。私の実践がある程度定型化できれば、他の先生も導入しやすいのではないかと狙いもある。そこで、この実践報告では、小説教材の指導でどのようなことが課題であり、それを克服するためにどの

ような指導を行い、その結果、どのような成果と課題が明らかになったかを考察することとする。

## 二 指導上の課題

### (1) 生徒の課題

本校の生徒は学力的にはごく平均のレベルに位置している。運動系のクラブ活動が活発であり、家庭学習の時間が短く、定期テストでは体力に任せて試験前に暗記して得点を取る生徒が多い。授業では、知識として習得したことをもとに原因や理由を考えたり、全体を構造的、総合的にとらえて自分なりの見解を表現するということが不得手である。つまり、教えられたことを何の関連づけもなく断片的に「覚える」ということはできるが、それを関連づけて「考える」「表現する」ということを苦手としている。

そこで、知識を受け取るだけの授業スタイルを転換し、主体的に授業に取り組む姿勢を持たせること、その中で本文を根拠に分析し、思考し、判断していくこと、自分の考えを表現することを仕掛けて

いくことが課題となるであろう。

## (2) 授業者の課題と小説教材の学習指導方法について

小説教材の学習指導でよくありがちなのは、旧態依然とした正解主義の指導（正解を求めさせる・教え込む）である。指導書に則って、「答え」を導き出すための、一問一答の授業、読解を中心とした指導に陥りやすい。そこには生徒の問題意識が存在しない。また、その反面、読者論的相対主義の指導も存在する。読みの多様性を認めるが、拡散して終わってしまい、「人それぞれに考え方はある。」という落としどころで終わってしまうことが多い。

そこで課題としては、生徒の主体性を生かしながら、生徒にどのように思考させる場面を作っていくか、確かな読解に基づいて、生徒の経験から生まれてくる多様な読みを保証するための終着点をどのように設定するかが課題となると考えた。

そこで次のような学習指導過程をおおまかに構想してみた。

- ① 小説の世界に聞き浸らせるために、最初の通読を授業者が行う。
- ② 初読の感想をもとに、課題を設定させ、主体性を持たせる。
- ③ 読解技能を向上させるために、語句の意味や漢字の習得はもちろん、場面や人物の設定、表現効果、心情理解など通常の読解指導を確実に行う。

- ④ 授業の中で、話し合う場面、発表する場面、考える場面、書く場面を常に取り入れていく。

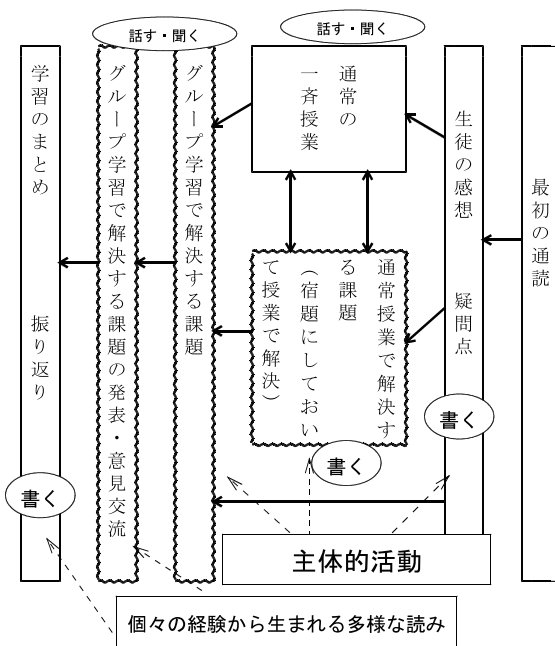
- ⑤ 生徒自身が出した課題のもとに、グループで話し合っ解決す

る課題と通常の一斉展開の授業の中で解決する課題とに分類し、二元展開で行う。

### 三 指導の実際

#### (1) 学習者と実践時期、時間数

- ・ 広島県立広島観音高等学校 二年四組 二単位
- 四十名（男子二十名、女子二十名）



・平成二十七年 一学期 九時間

## (2) 教材と教材観

①教材 『山月記』(中島敦) 『精選現代文B』(三省堂) 所収

### ②教材観

高校二年生の定番教材である。才能豊かで天才の誉れ高い李徴が、自分自身の中に巢食う自尊心と羞恥心という相反した意識にさいなまれ、その矛盾に葛藤・苦悩し、虎という異類の身と成り果てた姿を描いている。

高校二年になり、生徒は下級生を迎える。しかし本校の生徒の場合、下級生の存在は新しい仲間を得るとい喜ばしい側面もあるが、特に運動部の生徒にとっては大いなる脅威である。自分のポジションを脅かす可能性のある力量を持ったライバルの出現なのである。下級生の前で保たなくてはならない立場を守るのに必死となり、今までは下級生ということで甘えていた彼らも、今まで体験したことのない危機にさらされる。下級生に追い抜かされ、実力が露呈し、自分のクラブ内での地位が低下していく危機感である。そのため、高校二年生の四月はクラス替えでの人間関係再構築のストレスに加えて、クラブでの自分の地位が脅かされるとい危機感が彼らを襲い、心身ともに不安定さわまりない様子が言動からはっきりとわかるほどである。

そんな彼らに『山月記』を読むことを通して、李徴に自分自身を投影し、李徴の苦悩や葛藤に共感し、自分自身を見つめ直し、客観化し、自分自身への理解を深めることは、人間的成長を促すには最

適の教材であると考えた。

## (3) 学習指導目標

①漢文訓読調の文体に触れさせ、語句の意味や表現の効果を理解させ、文章を読み取る力を付けさせる。

②登場人物の性格や心情を理解し、登場人物を生き生きと想像させる。

③主人公李徴が虎となった理由を考えさせることを通して、自身を見つめ直し、自己の内面を豊かにする。

④グループで話し合ったり、発表したり、感想を述べ合ったりという活動を通して、話す力、聞く力を付けさせるとともに、様々なものの見方、考え方に触れさせる。

## (4) 学習指導過程

『山月記』の学習ではグループ学習と発表を取り入れることになるので、学習を始める前に、聞く、話す、読む、書くという活動ある程度活発にしておく必要がある。そのために四月当初から、授業では活発に話し合う、意見を交換する、書いたものを見せ合う、発表するという活動を意識的に数多く取り入れてきた。ある程度自由に発言すること、つたなくても何か思いを口にするということ、短い文章を書くことに慣れさせておいた。これはグループ学習やクラスの中での発表を行う前に必ず必要な準備である。その際に注意したことは、授業者自身が、冗談や雑談を交えながら親しみやすい雰囲気を作り、生徒の発言を肯定的に受け止め、表現しやすい雰囲気

を作っておくことである。またクラスの雰囲気作りも大切である。

自分が自由に発言しても受け止めてくれるという信頼関係がある程度できていないと、話し合いや、発表という活動はうまくいかない。クラス担任の先生との情報交換や、行事を観察しての声かけなども必要である。こういった良好な人間関係作りは必須である。

では簡単に学習指導過程の概略をまとめていく。

## 第一次 初読の感想 難読語の確認 語句の意味 漢字の読み書きの確認

【一時間目】 授業者が全文を読み、難読語を確認しながら、通読する。感想や疑問点、課題として取り上げたいことなどを書く。漢字の読み書き、語句の意味調べプリントを配布し、宿題とする。（その後、答え合わせは解答を配布し個別学習とする。）

第二次 疑問点の整理に基づいて課題Aと課題Bの二元展開を行う。

【二時間目】 疑問点、課題として取り上げたい点を授業者の方で整理したプリントを配布し、今後の学習展開について説明する。課題Bを授業で解決していく課題とし、プリントを配布、宿題としてやっておくように指示をする。一グループ五人の構成で八グループに分かれ、各グループで担当する課題Aを話し合う。残り時間で課題Bに取り組む。

【三時間目】 李徴の人物像について理解する。李徴が虎となつていくまでのいきさつや心情の変化について理解する。文体の特徴を捉え、それがどのような効果を上げているかを理解する。

【四時間目】 袁孝の人物像について理解する。李徴が虎となつた後

の心情を理解する。

【五時間目】 李徴が袁孝に頼み事をした理由と、李徴の自嘲癖について理解する。李徴が虎となつた理由について語る部分について、漢文訓読調になっている部分や難しい意味やいまわしが使われている箇所について意味を確認する。

【六時間目】 李徴がなぜ虎になつたのか、李徴の語りを中心に理解する。

第三次 課題Aをグループで話し合い、解決し、発表する。

【七時間目】 これまでの学習をもとに、各グループに分かれて、課題について話し合い、発表用紙にまとめる。【資料2参照】

【八時間目】 各グループの発表原稿をプロジェクトに投影し、それをもとにして発表をする。【資料3参照】

第四次 「李徴はなぜ虎になつたか。」について学習に基づいてまとめる。学習の振り返りをする。

【九時間目】 「李徴はなぜ虎になつたか」について配布されたプリントに記入していく。アンケート用紙に記入し、学習の振り返りをする。

【十時間目】 二期の最初の授業で、「李徴はなぜ虎になつたか」をまとめた数人の作品を読む。

この学習指導過程では、前述の指導上の課題を次のように解決できると意図した。

生徒の主体性を生かす・取り組む姿勢を持たせる

↓自ら課題を発見し、自ら解決する、または他人と協力しながら話し合っ解決するための課題設定させる。

生徒に思考させる場面を作る

↓発問応答式の授業で、常に思考を促す発問の設定を工夫する。

課題Aや課題B、学習のまとめの感想など、随所に書く指導を取り入れる。

グループやペアで話し合う場面を設定し、自ら考え、表現するよう取り組ませる。

確かな読解・本文を根拠に分析し、思考し、判断する

↓一斉授業で、いわゆる内容を読み取る授業を必ず行う。話す、書くということが先行してしまうと、文章から根拠を探そうとする姿勢が身につかず、「個人の妄想」に終わることもある。

自分の考えを表現する

↓発問に対する応答や、ペアワーク、グループワークで発言の機会を数多く持つ。書く指導を取り入れる。

生徒の経験から生まれてくる多様な読みの保証

↓最後に「李徹はなぜ虎になったか」という題で感想を書かせる。作品世界を自己の内面に引きつけるために、「自らの体験」と関わらせることを条件にする。そこで生まれた多様な読みをまた生徒たちと共有することで、自己理解、他者理解を深める。

#### 四 成果と課題

以下、指導目標に照らし合わせて考察する。

①漢文訓読調の文体に触れさせ、語句の意味や表現の効果を理解させ、文章を読み取る力を付けさせる。

冒頭部分から難読語が多発し、作品との距離感を感じてしまうので、授業者が適宜補足しながら読んでいった。プロによる朗読の再生も試したことはあったが、生徒の様子を見ながら、速度を速めたり、遅くしたり、補足したりということは必要である。ぜひ、授業者の朗読を推奨したい。漢文訓読調に慣れていないので、耳から音としても親しんでもらい、作品世界を味わい、一斉授業の中でも必ず生徒に読ませてから開始することが大切だと感じる。

語句の意味や難読語、漢字の読み書きは宿題として個別の取り組みとした。授業では、ポイントとなる部分（冒頭部分と虎になった理由を李徹が語る部分）のみ丁寧の意味を確認した。学習後のアンケートを見ると、おおむね理解できていっているようである。

表現の効果の部分はすべてをやろうとせず、風景描写と「おれ」「自分」の使い分け、傍点の効果について、一斉授業の中で読解と関連させて扱った。風景描写の効果や、月の意味するものについて、授業で問いかけても答えは出にくかった。おそらく、登場人物の心情を読み取ることばかりが中心で、表現についての学習の積み上げが不足しているのではないか。小学校、中学校での学習がどのよう

に行われているのか、検証する必要がある。特に、風景描写や色の描写、形象は読解を深めるポイントでもあるので今後、授業でも繰り返し扱っていく必要がある。

②登場人物の性格や心情を理解し、登場人物を生き生きと想像させる。

生徒にとつてはあまり親しみの無い、超エリートで中国の官僚、文人である李徴の心情に迫るには、生徒に人物像をしっかり想像させる必要がある。何度か授業をしてみても、冒頭部分の李徴の人物設定を読み取らせ、その後、発狂するまでの苦悩の様子を丁寧で追わせることは、李徴の内面に迫る基本的なステップであると感じた。今回も丁寧に一斉授業で行った。板書計画をもとに、発問応答形式で行った。書かれていることを確実に理解し、そこから何を読み取るかをまとめることで基本的な読解力を鍛えることになる。アンケートでも自己評価による達成度はおおむね良好であった。

③主人公李徴が虎となった理由を考えさせることを通して、自身を見つめ直し、自己の内面を豊かにする。

学習の最後の課題は、「李徴はなぜ虎になったか、その理由を学習に基づいて挙げ、また自分の体験や他人の体験などの具体例も挙げて根拠付け、まとめなさい。」であった。アンケートでは「大変良い」「良い」が三十五名中三十三名であった。生徒自身、確かな手応えや充実感があったのではないか。特にクラブ活動での悩み、体験談などが多く、「自分を知ることができた。」というコメントもあっ

た。ただ、もう少し苦悩や葛藤に共感し、掘り下げる記述があっても良いのではないかと思った。「才能があっても努力しよう」「努力をすれば報われる」「仲間と相談し合い、交流しよう」といった教訓的な感想も見られた。読みの多様性を保証しなければならぬのであるが、李徴のような異常なまでの自意識を理解するには、生徒はまだ未熟だったのではないか。将来生徒が成長して、李徴のような苦悩や葛藤が自分にも訪れた時、授業を思い出し、何らかの道しるべになることを願うばかりである。【資料1参照】

④グループで話し合ったり、発表したり、感想を述べ合ったりという活動を通して、話す力、聞く力を付けさせるとともに、様々なものの見方、考え方に触れさせる。

今回は、通常の授業でも意識して取り組んできた、聞く、話す、書くという活動を、グループで話し合い、用紙にまとめて発表するという大がかりなものへとステップアップすることが目標であった。グループでの話し合いでは司会一名、書記二名、発表二名の役割を与えて行った。

司会者は話し合いを進めるように努力していたが、話し合いが膠着状態になったり、脱線したりすると制御できないようであった。我々教員同士の話し合いでも日常茶飯事のことである。理想的な司会を生徒に求めるのは無理である。ともかくも、司会者としての自覚があり、みんなで協力しているという気持ちを共有することが大切なのではないかと感じた。

書記についても、話し合いを記録するのは相当な力量が要求され

るようだ。簡単なことではない。こちらもコンパクトにまとめることが出来るような用紙を用意し、ここに書けば、発表原稿にはなるというようなものを用意した。話し合いが高いレベルで進んでいるグループでは、書記の生徒の理解が追いつかず、難しい場面があった。授業でも、板書をノートに書くということ他に、板書もしないで、聞いた話をノートにメモする、自分なりに構成して書くという取り組みをする必要がある。

発表についても、とにかく前に出て、大きな声で聞こえるように話し合ったことを伝える、ということが目標とした。わかりやすい話し方を指導しようとする、イントネーションやアクセント、間の取り方、表情など、いくらやっても足りないということになってしまふからだ。表現したいことを、大勢の前でわかりやすく伝える経験を第一にした。発表原稿をプロジェクターに映して発表させて発表をするときはここ三年間、プロジェクターを用いることにしている。プリントを印刷して発表させるのも良いが、聞き手はプリントばかりを見てしまい、発表する者もプリントに視線を落として発表するので、視線が合わない。プロジェクター投影方式にすると、聞いている生徒は発表者と発表原稿を同時に見ながら、内容を理解することになり、集中して聞く。発表するほうも、聞いてもらっているという実感が得られ、何とかわかりやすくしようとする意識が働く。生徒の話し方の変わりように驚くばかりだ。今回も意欲的であった。しかし、どういふ話し方が理想なのか、授業者の方でも答えは出ていない。全員がたとえばプレゼンテーションの名人、スティーブ・ジョブズを目標とすべきなのか、疑問もある。

グループ発表では、課題を解決して、クラス全体に発表しなければならず、課題も意見を出し合わないといふ解決できないため、活発に話をしていた。発表内容も不足や未熟な点はあるものの、ある程度の答えは出ていた。発表ごとに質疑や感想を求めたものも、理解を深めることになった。この話し合いの後、「李徴はなぜ虎になったか、その理由を学習に基づいて挙げ、また自分の体験や他人の体験などの具体例も挙げて根拠付け、まとめなさい。」という課題に取り組んだ。作品は、今までの生徒の文章には見られない、言葉豊かな、迫力のある文章であった。学習後の振り返りのアンケート結果を見ても、生徒それぞれに学習に深まりがあったことがわかる。

## 五 おわりに

生徒を主体的に取り組ませる授業、特に、話す、聞くを取り入れた指導は難しい。発問応答方式でも、授業者がどのタイミングでどういふ発問をするか、生徒の答えをどう評価し、どう切り返していくか、高いレベルの対話の能力が求められる。またグループ学習も生徒の能力やグループの構成メンバーの人間関係、クラスの雰囲気など様々な要素が絡んでくる。

私自身も失敗の連続である。そのような果てしない失敗を経て経験していくしかないのであれば、莫大な時間を必要とする。これでは多忙を極める教育現場では、このような複雑な対話式授業、グループ学習を導入した課題解決型授業のノウハウは積み上げられないのではないかとあきらめさえも感じる。ことがある。

しかし、生徒の生き生きとした活動や、自己認識の深まりを見ると、重要で必要な活動であるということは否めない。すべての授業で主体的学び（アクティブラーニング）を進めていくには、どうやって定型化、マニュアル化し、指導者が取り組みやすくしていくかが求められているのではないか。

ともあれ、私自身が常に試行錯誤、失敗の連続である。今回、このように実践を整理し、報告する機会を得て、様々な課題が浮かび上がってきた。またご指摘、ご助言をいただいで、今後の授業に生かしていきたい。

（広島県立広島観音高等学校）

【資料1】生徒の書いた文章

①この作品は人間の心の中に猛獣がいるということを描いた作品である。

僕は李徴が虎になった理由は、李徴の心の中の猛獣が外に出てきたからだろうと思った。李徴は人と交わることを避けて自分の才能だけで詩業を失敗し、そして李徴の心の中にある「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という矛盾を続けて、人間として存在できなくなってしまう、虎になってしまったのだ。僕にもちよつと違うかもしれないが、似たような体験があった。僕がいつも我慢をしていることがあったが、それを爆発させたいと思ったことが何度もあった。しかし僕は一度もそれを爆発させ怒った事はなかった。それが心の自分を抑えるということだと思った。

李徴も同じように心の中にある猛獣を抑えて抑えきれなくなつて幻聴まで聞こえ、李徴のの二面性と虎の模様、そして虎がいつも李徴と同じように一人で生きているから、虎になったのだと思った。人間は自分の心の中の猛獣を押さえつけているんだと思った。

②この作品は努力をせずに結果が出なかつた後悔ということを描いた作品である。

李徴の性格上自分には才能がある、才能のない者と仲良くしたくないと思つており、努力をしなかつた結果、虎になってしまいました。そして、虎となつた李徴は、誰にも分かつてもらえない苦しみを一生背負っていくことになりました。

私にも似たような体験があります。中学生の部活で私は陸上部に入っていました。そこで私はそんなに努力をせずに入賞しました。私は努力をせずに入賞出来るならこれ以上努力することはないじゃん。入賞以上狙っているわ



けでもないし、努力なんて楽しくないからしなくていいやと思うようになってきました。それから練習と言えば大会前に少しするだけでした。しかし周りはちゃんと練習して上達しているから、私だけ取り残された感じになり、入賞することはなくなりました。そうやってうだうだと中学三年間を過ごしました。ですから李徴の気持ちはわかります。少し才能があると人は努力を怠ります（普通の人は）。だから李徴が虎となってしまったことは仕方がないようにも思えます。今後李徴がどんな生活を送るのかは知るよしもありませんが、虎となった今、努力したいとは思わないでしょう。だから李徴は虎には戻れない。実際に私たち人間が努力を怠ったからといって動物になる事はありませんが、以上のように後悔しないために今を精一杯頑張りたいと思います。

③この作品は**才能があっても努力しなければ意味がない**ということを描いた作品である。

李徴はプライドが高く、詩の才能を磨くことをしなかった上に、自分に詩の才能がないということも他人に思われなくなかった。このような臆病な自尊心が李徴の姿を虎に変化させた一つの原因だと考える。また妻子のことよりも自分の詩業の事ばかり考えていたことも原因だと思ふ。

私は部活動をしているが、この山月記の物語と重なる内容があると思う。その内容とは部活動で負けたくない相手との練習を避け、だからといってその相手よりも多く練習をするわけでもないということである。思いと行動が矛盾しているから、結果がついてこず挫折するのだと思つた。チームのことよりも自分のことはかり気にしている人は上手くならないと先生がいつもおっしゃっているが、その意味をこの物語を読み終わってみて実感した。

もし李徴が詩の才能を切磋琢磨して磨いていればきっと素晴らしい詩家に

なっていたと思う。そのような意味で李徴はとてもしたい人材だと私は思った。その李徴自身が一番このことを理解しており、悔しい思いをしていると思つた。

④この作品は**心がどんな影響及ぼすのか**ということを描いた作品である。

李徴は臆病な自尊心と尊大な羞恥心を人間の時に人並み以上に持っていた。そして尊大な羞恥心が大きくなったとき、二つの思いがもたなくなり、虎になってしまった。人間で言う二重人格と同じで、それが李徴の場合人間と虎というようになっているのだと思う。人は本当に弱いから、ちょっとしたことでも悩んだり、傷ついたり、心が揺らいだり、腹が立つたりする。でもその度に、周りの人が助けてくれたり、自分の理性で何とかしたりして、自分を保って行くのだと思う。私自身、何度も自分の中で葛藤してきて、その時の思っていることで心が左右されて、自尊心と羞恥心のよに逆の心をもつことだっただくさんあった。それでも周りにいてくれる仲間が助けてくれて、なんとか自分自身の葛藤から抜け出してきた。李徴には臆病な自尊心と尊大な羞恥心を持っていることを相談できる周りの人がいなかったのかなと思つた。もし周りに李徴の心を助けてあげる人がいれば、李徴は虎にならなかつたかもしれない。私の友達について最近まで一緒に笑いあっている仲間がいた。でもその子は二つの思いを持っていた。「部活のみんな」といえるのは楽しい」という思い、「部活は嫌い」という思い。「部活が嫌い」という思いが自分の中で勝ってしまった時、人が変わったようになってしまった。それと同じだと思つた。

【資料2】生徒がグループで話し合った課題

2年 現代文 山月記 課題A 年 組 番 名前1 一  
 グループで話し合った課題を発表しよう。

- ①時間は2分30秒から3分。  
 ②評価の基準。  
 A 聞き取りやすい声で発表していたか。  
 B 発表のための原稿はわかりやすく書かれていたか。  
 C 納得できる根拠を示して、説得力を持たせていたか。

<p>A 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>なぜ他の動物ではな          くて虎だったのか。 ☆</p>	<p>B 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>なぜ李徴がなっ          たら虎だったのか。 ☆</p>	<p>C 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>最後の咆哮には何          が込められているか。 ※</p>
<p>D 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>猿様の役割とは。 ☆</p>	<p>E 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>どうしたら李徴は          もう一度人間になれる          か。 ※</p>	<p>F 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>宿に泊まった夜に、          李徴を戸外へ招いた声とは          いったい何だったのか。 ☆</p>
<p>G 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>どうして李徴は詩人          として成功したのか。 ※</p>	<p>H 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>なぜ李徴は自分が          執筆したものを後世に残          そうと思ったのか。 ☆</p>	<p>☆：答えがまとめられそ          うなもの          ※：さまざまな答えが予          想されるもの</p>

【資料3】生徒の発表原稿（プロジェクトで撮影）

2年 現代文 山月記 課題A 年 組 番 名前1 一

<p>B 課題A 発表原稿          課題B 発表原稿          課題C 発表原稿          課題D 発表原稿          課題E 発表原稿          課題F 発表原稿</p> <p>なぜ李徴がなっ          たら虎だったのか。</p>
---

最初に自由に話し合った意見では：  
 虎のしな模様↓気持ちが交互にしている。  
 虎は自分だけ強いと思っている⇒李徴は自分に  
 才能があると思ってる  
 ライオンは大人教で行動、虎は基本一人で行動  
 本文中または授業での学習から根拠を探してみると：  
 この尊大な羞恥心が猛獣だった。  
 虎だったのだ。

グループで話し合った結果：  
 猛獣だからライオンなどでもないが、虎の模様  
 や特徴から李徴に似た部分があるため  
 虎となった。また、気持ちや交互していること  
 が模様に現れた。